

Title	前置詞withの「関して」義
Sub Title	On the 'regarding' sense of the preposition with
Author	平沢, 慎也(Hirasawa, Shinya)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 (The Keio University Hiyoshi review of English studies). No.82 (2025. 9) ,p.1- 32
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20250930-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

前置詞 with の「関して」義*

平 沢 慎 也

1. はじめに

筆者はかねてより概略「…に関して」に相当する意味を表す英語の諸表現に関心を持っている。理由はいくつかあるが、まず、英語学習者として表現ごとの意味・用法の違いが気になるということがある。about, by, concerning, for, in, regarding, with, with respect to, など実に多くの表現が日本語の「…に関して」に近い意味を表しうるが、それぞれの表現の独自性は、もしあるとしたら、どのようなものであろうか。また、言語の研究者としても、一見したところ同じような意味を表す多くの表現の間に母語話者が微妙な意味の差を見出していることがわかったならば、人間の脳の繊細さ、知性の鋭敏さに心打たれるところである。

「もしあるとしたら」「わかったならば」と仮定の表現を用いたのは、筆者の「関して」研究はまだまだ発展途上の段階にあるからである。今のところ、about の「関して」義の全体像については平沢 (2019), by と for の「関して」義が活性化していると思われるいくつかの表現パターンについてはそれぞれ平沢 (2025a, b) (特に b) と平沢 (2018) を発表しているが、残っている仕事は多い。本稿は「残っている仕事」の一部である、with の「関して」義の全体像の記述を試みるものである。

本稿の構成は以下の通り。2 節では「…に関して」の with が使われていることがわかりやすい be the case with という慣習的な表現パターンの使われ方を丁寧に観察し、with の「に関して」義とはどのようなものであるかを考える。3 節では be the case with の類例といってよい慣習的な表現パターンをいくつか紹介する。4 節では、「に関して」義の with が、2 節と 3 節で見たのとは重要な点で異なるタイプの用法でも用いられることを指摘し、2 つのタイプの間の関係について論じる。5 節では、4 節で新たに存在を指摘した用法タイプには（3 節まで見てきた用法タイプと同様に）慣習的な表現パターンがいくつも存在していることを指摘する。6 節では、「に関して」義の with の使用を動機付ける（広義の）対比という概念を導入する。7 節は結語であるが、まとめに代えて、英語学習者が「に関して」義の with を使おうとするときに注意すべき点について指摘する。

2. be the case with

本節では、「に関して」義の with について考える取っ掛かりとして、[be the case with X] という慣習的な表現パターンの使われ方をじっくりと観察してみたい。まず、[be the case] 「正しい、実情である、成り立つ」について確認する。以下の例 (1) では、点線下線部 (He has lost whatever chance he might have had for happiness) で表現されている命題¹⁾ が、実線下線部の指示代名詞 that で受けられ、「その命題が真であるならば」という仮定が if that is the case と表現されている。

- (1) Blue feels tears forming in his eyes, but more than grief he feels anger at himself for being such a fool. He has lost whatever chance he might have had for happiness, and if that is the case, then it would not be wrong to say that this is truly the beginning of the end.²⁾

(Paul Auster, *Ghosts*)

目に涙が湧きあがってくるのをブルーは感じる。だが彼の胸にあるのは、悲しみよりもまず、自分の救いがたい愚かさに対する怒りである。彼にとって、幸福になるチャンスが少しでもあったにせよ、それももうこれですべて失われてしまったのだ。だとすれば、こう言っておそらく誤りではあるまい。これはまさに終わりののはじまりなのだ。

(柴田元幸 (訳) 『幽霊たち』)

(1) の *that is the case* の *that* が指しているのは、点線下線部で提示されている命題そのものである。「何を当たり前のことを」と思われるかもしれないが、これが次に見る例との比較において重要になってくる点なのである。

本題の [*be the case with X*] は、すぐ上で見た [*be the case*] に、日本語の「X に関して」に概ね相当する意味を表す [*with X*] が後続したものである。例 (2) を見てみよう。

(2) [状況説明] オンライン掲示板における *u/affrodeity* 氏の *My mom, an Indian homemaker lives way too monotonous life.* 「うちのお母さん、インド人で主婦なんだけど、生活の単調さっていったら、もうあんまりで」から始まる投稿への *sneaky_scarecrow98* 氏のコメント。

This used to be the case with my mom too.

(https://www.reddit.com/r/india/comments/w3sdt2/my_mom_a_homemaker_lives_a_very_monotonous_life/)

うちのお母さんも昔そうでした。

ポイントの主語の *This* (下線部) は何を指しているのかである。もしも

(1) と同じように既出の命題そのものを指すのだとしたら、この 1 文は、元の投稿者の母親が単調な暮らしをしているという命題そのものが、コメ

ント主の母親に関しても成り立つ、というまるで意味をなさないことを言っていることになってしまう³⁾。この英文の This が指しているのは、正しくは、「〇〇がひどく単調な生活をしている」のように、単調な生活を送っているのが誰なのかという情報を空にした命題である⁴⁾。元の投稿の命題では u/affrodeity 氏の母親として指定されていたが、その部分がここでは空所化されているのである⁵⁾。そして with my mom が後続することによって、空所「〇〇」をコメント主の母親で埋めた命題が真であることが示される。これが (2) の意味の構造である。

(2) では、[be the case with X] の主語に来ているものが、既出命題の中の u/affrodeity 氏という特定の個人が空所化されたものだったが、不特定多数の人間が空所化される場合もある。以下の例 (3) を見てみよう。

- (3) A lot of people have had trouble working with him, and that was certainly the case with me. (<https://www.britannica.com/dictionary/case>)

彼と一緒に仕事をして大変な思いをした人はこれまでたくさんいた。
私は間違いなくそのうちの 1 人だった。

実線下線部の that が指している命題は「〇〇が彼と一緒に仕事をして大変な思いをする」であり、点線下線部の「たくさんの人」部分が空所化されたものである⁶⁾。「たくさんの人」部分が空所化されなかったら、that was certainly the case with me は「たくさんの人」に関する命題そのものが「私」に関して成り立つという、意味をなさない内容を述べていることになってしまう。

空所化される部分が人間である必要はない。以下の例 (4) では、点線下線部の「タバコの箱」部分が空所化された命題「〇〇には健康上の害悪に関する注意書きが書かれている」が関係代名詞 which で受けられ、be (not) the case の主語になっている。

- (4) Although hypocritical, at least cigarette packs have health warnings on them, which is not the case with alcohol containers.

(<https://www.abc.net.au/news/2007-08-08/time-to-act-on-alcohol-abuse/2525320>)

形ばかりのものとはいえ、少なくともタバコの箱には健康上の害悪に関する注意書きが書かれているが、酒の缶・瓶などはそうではない。

そしてその空所部分を「酒の缶・瓶など」で埋めてみると、その命題は偽となる、ということが言われているわけである。ここにおいてもやはり、空所化がなされなかったら、つまり which が指している命題がタバコの箱に関する命題そのものだとしたら、それが酒の缶・瓶などに関して真だとか偽だとか述べるのは意味をなさない。

これまで見てきた例においては、[be the case with X] の主語に来る命題が文脈の中で既に提示されたものであったが、以下の (5) のように (疑似関係代名詞 as を用いることにより) [be the case with X] よりもあとに提示される場合も同様に分析できる。

- (5) [...] she [=Maria] went out one morning to buy film for her camera, saw a little black address book lying on the ground, and picked it up. [...] Maria's first thought was to return it, but as is often the case with personal property, the owner had neglected to write his name in the book.

(Paul Auster, *Leviathan*)

[...] マリアはある朝カメラのフィルムを買いに出かけて、路上に小さな黒いアドレス帳が落ちているのを目にとめ、拾い上げた。

[...] 持ち主に返してあげよう、とマリアはとっさに思ったが、個人の持ち物によくあるように、所有者は自分の名前を書くことを怠っていた。

(柴田元幸 (訳) 『リヴァイアサン』)

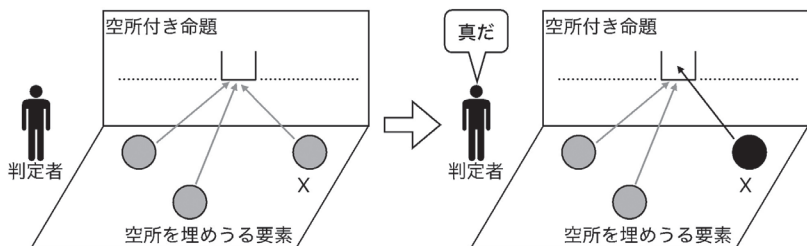


図1 「空所付き命題+真である+空所をXで埋めると」

これまで「be the case with X」というように主語を含めなかった中で表現パターンを表記してきたが、ここで主語まで含めて「主語命題+ be the case + with X」のように表記を改めると、以上見てきた通り、「主語命題+ be the case + with X」の意味は「空所付き命題+真である+空所をXで埋めると」という構造をしていると言える。この意味構造は図1のように模式的に図示することができる。

図1の左図は、空所付き命題が、空所を埋める要素によっては真にも偽にもなりえるものであることを示している。各要素から空所への矢印および各要素自体がグレーで塗られているのは、各要素が空所を潜在的に埋めうるものに過ぎないことを示している。たとえば例(2)であれば「○○はひどく単調な生活を送っている」という命題の空所「○○」は元の投稿者の母親という要素によってもコメント主の母親という要素によっても埋めうるものである。図1を例(2)に適用した図を以下に図2として示す。

一方、図1の右図において要素XおよびXから空所に向かう矢印が黒く塗られているのは、「主語命題+ be the case + with X」では主語命題の空所がXによって実際に埋められることになることの反映である。そして、そうして完成した命題が「真である」と誰かしらの判定者によって断定される。例(2)であれば、「○○はひどく単調な生活を送っている」という命題の空所「○○」がコメント主の母親という要素によって埋められ(図2の右図でコメント主の母親に対応する要素とそこから空所への矢印が黒く塗られている)

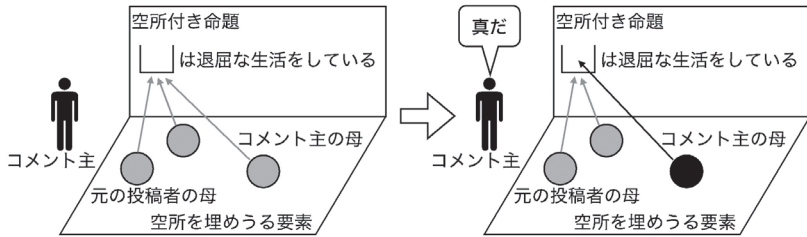


図2 例(2)の意味構造

塗りにになっているのはその反映), そうして完成した命題が真であるという判定がコメント主によって下される。

〔主語命題 + be the case + with X〕は〔空所付き命題 + 真である + 空所を X で埋めると〕という意味構造を持つということを文章および図による記述で示してきた。これにより〔主語命題 + be the case + with X〕の意味のすべてが捉えられたと主張するつもりはない。意味というのは非常に多面的なものであり、ここで捉えたのはあくまでも命題の真偽判定に関わる側面だけだからである。それでも、〔空所付き命題 + 真である + 空所を X で埋めると〕という意味構造を持つという特徴は、少なくとも前置詞 with の意味という観点からは、非常に重要な特徴であると言えるだろう。というのも、この意味構造を持つ with 表現は〔主語命題 + be the case + with X〕に限られないからである。3 節でいくつか紹介しよう⁷⁾。

3. be the case with の類似表現

3.1. be true with

まず, 〔主語命題 + be true + with X〕も〔主語命題 + be the case + with X〕と同じように分析することができる。(6) に例をいくつか示す。

- (6) a. My parents are not rich. I say this because people sometimes

think that everyone who goes to private school is rich, but that
isn't true with us. (R. J. Palacio, *Wonder*)

僕の両親は金持ちではない。どうしてこんなことを言うかという
と、私立の学校に通っている人はみんな金持ちだと誤解している
人がいるけれど、うちはそうではないからだ。

b. The same **is true with** animals.

(『リーダーズ英和辞典』第3版 s.v. *true*)

同じことが動物にも言える。

c. Most people look forward to the weekend, but **with** him the op-
posite **is true.**

(https://www.oxfordlearnersdictionaries.com/definition/english/opposite_2)

たいていの人は週末を楽しみにしているものだが、彼の場合はそ
の反対だ。

(6c) を例にとると、the opposite が指している命題は、直前の Most peo-
ple look forward to the weekend の「たいていの人」部分を空所化してさ
らに opposite にした命題、すなわち「○○は週末が来るのを嫌がってい
る」という命題である。そして、空所「○○」を「彼」で埋めるとこの命
題が真になる、というのが with him the opposite is true の意味である⁸⁾。

3. 2. be the way with

これまで見てきたパターンの the case および true の部分が the way に
なった [主語命題 + be the way + with X] という表現もある。この表現
においては、限定的に、the way が「実情、現実のものごとのあり方」の
ような意味を担っていると考えられる。

- (7) a. [状況説明] Darrin Stephens と結婚した Samantha の料理を、
Darrin の母親 Mrs. Stephens が褒めている。Endora は Samantha

の母親。

Endora : But she [=Samantha] doesn't like my methods.

Samantha : Oh, Mother!

Mrs. Stephens : Really. Now, **isn't that the way with** children?

(*Bewitched*, Season 3, Episode 29)

エンドーラ : でもサマンサは私の料理のやり方が気に入らないみたい。

サマンサ : もう、お母さん！

スティーブンズ : そうなの。まあでも、子どもってそういうものじゃないですか。

b. He was showing off, as **is the way with** adolescent boys.

(https://www.oxfordlearnersdictionaries.com/definition/english/way_1)

思春期の男の子にはよくあることだが、彼は自分の能力をひけらかしていた。

c. But then it **is** always **the way with** those well-off people.

それにしても、そういう裕福な人々はいつもそうするのだ。

(『クラウン英語イディオム辞典』 s.v. *way* : 訳文末句点は引用者)

(7a) の *isn't that the way with children?* は否定疑問の形式を取ることによりやや複雑に見えるが、たとえば *Isn't she cute?* が *She's cute.* と同じ方向性の意味を表すことを踏まえれば、*isn't that the way with children?* も *that is the way with children* とほぼ同義だと考えられる。この *that* が指す命題は、「Samantha が母親のやり方を嫌う」という命題の「Samantha」部分を空所にした「○○が母親のやり方を嫌う」という命題である。「○○」を「子ども一般」で埋めるとこの命題が真になるということを言っているのが *that is the way with children* であり *isn't that the way with children?* である。

3.3. be going on with

これまで見てきた be the case with, be true with, be the way with はすべて主語に来るものがいかにも「命題」という印象をはっきりと与えるものであったが、本節で扱う be going on with の場合、主語に来るのは状況ないし出来事であるという印象を強く受けるのではないかと思う。

- (8) a. Luke had figured on telling her his worries that something funny **was going on with** the wolves, but it didn't seem the right time.

(Nicholas Evans, *The Loop*)

ルークは狼たちの様子がおかしい気がして心配だと言おうかとも思ったのだが、今はその話をするべきタイミングではないと感じられた。

- b. [状況説明] 目が覚めたら電気を放つ怪物になっていた Max が街で暴れている。そこへ Spider-Man がやってくる。

Max : I don't know what's **going on with** me.

Spider-Man : I can see that. I can ... I believe you.

(映画 *The Amazing Spider-Man 2*)

マックス : 僕の身体に何が起きているのか自分でもわからないんだ。

スパイダーマン : そのようだね。うん、信じるよ。

- c. [状況説明] ステージ4の癌を患っている写真家からギャラリーの新人従業員への発話。

"I'm sure you've been following my social posts and videos," she began, "so you probably have a general sense of what's **going on with** my illness."

(Nicholas Sparks, *The Wish*)

「きっと私の SNS の投稿とか動画とか今も見てるよね」とマギーは口を開いた。「だから病気がどのくらい進んでるかはもうだいたいわかってるよね」

実際, be going on with の主語を状況・出来事として捉えることも可能だろう⁹⁾。しかし, ある要素を状況・出来事として捉えることができるからといって, その要素を命題として捉えることはできないということにはならない。この2つの捉え方は同時に成立しうるものである。(8a) を例に取れば, 狼たちにおかしな出来事が起こっていると考えても, 狼たちに関しておかしな命題が成立していると考えても, いずれにせよ全体の文意を適切に解釈できていることになる。

be going on の主語を出来事と捉えるか命題と捉えるかによって, be going on の意味も変わってくる。前者ならば「起こっている, 発生している」であり, 後者ならば「真である」である。後者の場合, be the case や be true と同じ意味で be going on が用いられていることになる。

そして be going on with の主語を命題と取るならば——つまり [主語命題 + be going on + with X] のパターンを想定するならば——主語命題の空所を X が埋めるという図式が見て取れる。たとえば (8a) では, something funny が指す funny な命題を構成する要素のうちの1つが空所になっており, その空所を the wolves という要素が埋めると, 当該の funny な命題が真になるのである。「狼たちが関与するおかしな命題が真になっている」というわけだ。(8b) と (8c) のように主語命題が what である場合も同様に分析できる。「私 (の病気) が関与するどのような命題が真になっているのか」というのは, 説明的に言い換えれば, 「私 (の病気) という要素が命題内の空所を埋めることによってどのような命題が真になっているか」ということである。

3. 4. happen with

基本的には 3.3 節の内容がそのまま当てはまるので詳細は省くが, [主語命題 + happen + with X] というパターンを認めることができる。進行形を取った (9) などを見ると, 3.3 節の [主語命題 + be going on + with X] とそっくりだと感じられるだろう¹⁰⁾。

- (9) a. I have no idea what's **happening with** Katherine.

(Mitch Albom, *The First Phone Call from Heaven*)

最近のキャサリンは一体どうしてしまったのか、私には全く分かりません。

- b. [状況説明] 話し手は娘 Veronica が救急搬送されたということは知っているが、なぜ救急搬送されたのかは知らないため、電話で妻 Arlene に尋ねている。

Arlene, what's **happening with** Veronica?

(*Columbo*, Season 10, Episode 11)

アーリーン、ヴェロニカはどうなんだ？

しかし [主語命題 + happen + with X] の場合には、進行形で発話時の状態を語る用法以外に、進行形でない形を取って、過去においてどんな命題が真であったか (例 (10) 参照)、これからどんな命題が真になるか、過去／現在／未来の別にとらわれず世の常としてどんな命題が真であるかを語る用法も慣習化している。進行形でない [主語命題 + go on + with X] が (これに比べ) 慣習化していないことと比較されたい。

- (10) [状況説明] Jerry は、車内電話で Elaine と話している最中に当て逃げを目撃し、犯人の車を追った。電波が悪くなり通話が途中で切れてしまったので、Elaine はそのあとどうなったのかを知らない。以下はその翌日に Elaine が Jerry の家を訪れる場面。

Elaine : So, what **happened**?

Jerry : **With** what?

Elaine : **With** the car.

Jerry : What car?

Elaine : The hit and run. (*Seinfeld*, Season 3, Episode 19)

エレイン：で、どうなった？

ジェリー：何が？

エレイン：車の話よ。

ジェリー：車の話って何。

エレイン：当て逃げの話よ。

3.5. 3 節まとめ

ここまで、「関して」義の with を含む表現パターンとして、[主語命題 + be the case + with X], [主語命題 + be true + with X], [主語命題 + be the way + with X], [主語命題 + be going on + with X], [主語命題 + happen + with X] を観察し、これらはすべて [空所付き命題 + 真である + 空所を X で埋めると] という意味構造を持つことを確認してきた。次節では、「関して」義の with を含む表現パターンの意味構造には大きく分けて 2 種類存在し、3 節で見てきたものはこのうちの 1 種に相当するということを指摘する。

4. 「関して」義の with の 2 種類の使い方

4.1. 「真である」明示型

「関して」義の with を含む表現パターンとしてこれまで見てきたもの—— [be the case with X], [be true with X], [be the way with X], [be going on with X], [happen with X] ——には、まだ十分に注意を向けていない共通点がある。それは、「真である」「成り立っている」「正しい」ほどの意味が言語表現というかたちで明示されているということである。具体的には be the case, be true, be the way, be going on, happen の部分がそれにあたる。

ここで少しの間、英語の with 表現を離れて一般化して考えてみると、「真である」「成り立っている」「正しい」のような意味を明示する（言語表現として表に出す）というのは、コミュニケーションのデフォルトのあり方

とは言い難い。たとえば自分が空腹であることを伝達するのに以下のように言うのは日本語でも英語でも不自然だろう。

- (11) a. ?? 私は空腹だという命題が真なんだけど。
 b. ?? ああ、もう、私はお腹が空いてるっていう事態が成り立っちゃってるなあ。
 c. ?? 今さあ、「私は腹ペコだ」が正しいんだよね。
 d. ?? It's the case that I'm hungry.
 e. ?? The proposition that I'm hungry is true.
 f. ?? It's true that I'm hungry.

それでは、「お腹がすいたなあ」のように自然な発話をする話者は、「真である」とか「成り立っている」とかいったことを意味の中にまったく含めていないのだろうか。いや、そうではない。もしそうだとしたら、「お腹がすいたなあ」は話し手が空腹であるという命題を真偽が確定していないもの（真偽がこれから確定されるもの）として提示する文だということになってしまう。これは「お腹がすいたなあ」の文意を正しく反映できていない。「お腹がすいたなあ」は話し手が空腹であるという命題が真であるということを、ことさらに明示はせずに意味の内に含んでいるのである。ことさらに明示する(11)のような表現の意味構造を「命題＋真である」と表記するとしたら、命題が真であることをことさらに明示はせずに意味の内に含むような表現の意味構造は、「真である」を完全に排除した「命題」ではなく、「真である」をカッコでくくり「命題（＋真である）」などと表記されるべきものである。

「関して」義の with を含む表現パターンとしてこれまで見てきたものは、デフォルト的ではない「命題＋真である」に with X が後続するものであった。このデフォルト的ではないコミュニケーションパターンの「命題＋真である」に with X が後続できるのであれば、デフォルト的である「命

題（＋真である）] にも with X が後続できるのではないかという予測が——言い換えるならば「関して」義の with にはこれまで見てきた「真である」明示型の用法に加えて「真である」非明示型の用法も存在するのではないかという予測が——自然な予測として立つ。次節ではこの予測が裏付けられることを示す。

4.2. 「真である」非明示型

「真である」を明示的に表す be the case, be true, be the way, be going on, happen といった表現が含まれていないが文意の中に「真である」が含まれる例として (12) を見てみよう¹¹⁾。

(12) a. Side effects are rare **with** this medicine.

(<https://medical-dictionary.thefreedictionary.com/Digitalis+Drugs>)

この薬は副作用が出にくい。

b. [状況説明] 直接話法を多用する話者の発話の例が示されたあと：

With other speakers such language is rare, or perhaps absent altogether. (Wallace Chafe, *Discourse, Consciousness, and Time*)

他の話者の場合には、このような言葉遣いはまれかもしれない。また、極端な場合にはまったく観測されない。

(12a) では、Side effects are rare の提示する命題が真であるというのが文意の中に確かに含まれるのである（真偽未確定の状態で投げられた命題ではない）。(12b) における such language is rare, or perhaps absent altogether も同様である。「真である」が表現はされていないが意味には含まれている。つまり (12) の with 句を除いた部分の意味構造は「命題（＋真である）」なのである。それでは、with 句はここにどのように関わってくるのだろうか。

with 句を除いた部分をもう一度よく見直してみよう。Side effects are rare は「副作用が生じることはまれだ」ということであるが、副作用というのは必ず何かの副作用であるから、その「何か」が何であるのかが言われないと、意味的に完結しない命題である。言ってみれば「○○の副作用が生じることはまれだ」という空所付き命題なのである。with this medicine はこの空所を埋める要素を導入する働きをしていると考えられる。「○○の副作用が生じることはまれだ」という空所付き命題は空所「○○」を「この薬」で埋めると真になる、ということ。「真になる」の部分明示せずに述べているのが (12a) なのである。「真である」明示型との違いは「真である」を明示しているかどうかだけであるということがわかるだろう。実際、(12a) を「真である」明示型で次のように書き換えても、文意は概ね保たれる。

(13) It is the case **with** this medicine that side effects are rare.

このような書き換えが可能であるということは、「真である」明示型と非明示型とで with が担っている意味は同じであることを示唆している。

同じことが (12b) に関しても言える。such language is rare, or perhaps absent altogether の such language「このような言葉遣い」の部分には、「話し手」という空所が付いていると言える。話し手がないところに言葉遣いなどあるはずもないからである。言葉遣いとは常に誰かの言葉遣いなのである。したがって such language is rare, or perhaps absent altogether の提示する命題は「○○のこのような言葉遣いはまれかもしくは極端な場合にはまったく観測されない」という空所付き命題なのだと言える。そして空所「○○」を other speakers「他の話者」という要素で埋めるとこの命題が真になると（「真になる」を明示せずに）言っているのが (12b) なのである。(12b) もやはり (14) のように「真になる」明示型で書き換えることができる。

- (14) It is the case **with** other speakers that such language is rare, or perhaps absent altogether.

実例をもう少し見ておこう。

- (15) [...] Quinn had been a devoted reader of mystery novels. [...] Whereas his taste in other books was rigorous, demanding to the point of narrow-mindedness, **with** these works he showed almost no discrimination whatsoever. (Paul Auster, *City of Glass*)
 [...] 彼はミステリー小説を愛読していた。[...] ほかのジャンルの本に対する好みはきわめて厳格で、偏狭と言ってもいいくらいうるさいのに、ことミステリーに関してはほとんど無差別に受け入れた。
 (柴田元幸 (訳) 『ガラスの街』)

he showed almost no discrimination whatsoever が提示する命題は「クインはほとんどいかなる線引もしない」ということだが、線引というのは何かしらの領域の中である。人はたとえば食べ物という領域の中で美味しいものとそうでないものという線引をしたり、3年A組という領域の中で数学が得意な人と不得意な人という線引をしたりするが、そもそも食べ物という領域や3年A組という領域が存在していなければ、それを分割する線など引きようがない。「クインはほとんどいかなる線引もしない」という命題は、「クインは○○という領域においてほとんどいかなる線引もしない」という空所付き命題なのである。そして空所「○○」を these works 「こうした作品」つまりミステリー小説という要素で埋めるとこの命題が真になると言っているのが (15) なのである。やはり be the case with で書き換えられる。

- (16) it is the case **with** these works that he showed almost no discrimi-

nation whatsoever

副作用の例、言葉遣いの例、ミステリー作品の例は平叙文であったが、疑問文の実例も見よう。

- (17) [状況説明] Jim は、会社の同僚でかつ副業でホテル経営をしている Dwight のホテルに泊まりに来ている。

Dwight : Is everything satisfactory **with** your stay?

Jim : Yeah. Yeah.

Dwight : Great. (*The Office*, Season 4, Episodes 7–8)

ドワイト：今回の宿泊にはご満足いただけていますか。

ジム：ああ、うん。

ドワイト：よかったです。

Is everything satisfactory の部分は、everything is satisfactory の提示する命題が真であるかどうかを尋ねるものである。everything is satisfactory の提示する命題は、またしても空所付き命題である。言い換えると、ここで真偽が問われている命題は、まさか「この宇宙に存在しうる万物が satisfactory だ」という命題——everything が本当に everything であるような命題——ではなく、「○○のすべての側面が satisfactory だ」という、everything に対して限定がかかった命題である。そしてこの空所「○○」を埋める要素が your stay 「今回のご宿泊」なのである。「○○のすべての側面が satisfactory だ」という空所付き命題は空所を「今回のご宿泊」という要素で埋めたら真になりますか、というのが Dwight の質問の意味である。be the case with による書き換えは今回も有効である。

- (18) Is it the case **with** your stay that everything is satisfactory?

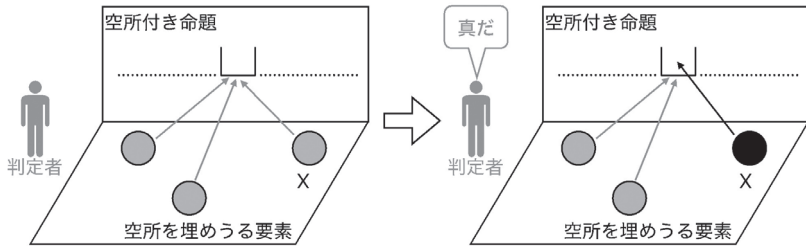


図3 「空所付き命題（+真である）+空所をXで埋めると」

このように書き換えても Dwight の元の質問の文意は保たれていると言えるだろう。

以上見てきたように、「真である」を明示していないことにより「命題（+真である）」という（コミュニケーションにおけるデフォルト的な）意味構造を持っている表現に、「関して」義の with 句が後続した場合、全体の意味構造は「空所付き命題（+真である）+空所をXで埋めると」となる。「真である」を明示した場合の意味構造を図1のように図示したのにならって、非明示型は図3のように図示できる。

「真である」明示型と違って、非明示型は「真である」という判定が下されていることの意味的な際立ちが低くなることを、意味構造の文字上の表記としては（+真である）とカッコの使用に反映させてきたが、図3ではこの判定および判定者をグレーで塗ることによって表現している（図1では黒塗りだったことと比較されたい）。図1と図3の共通している部分において前置詞 with の「関して」義が捉えられており、相違点においてこの with の「真である」明示型の用法と非明示型の用法の違いが捉えられている。

5. 「真である」非明示型の慣習的な表現パターン

「真である」明示型の用法には、2 節と 3 節で見たように、[be the case

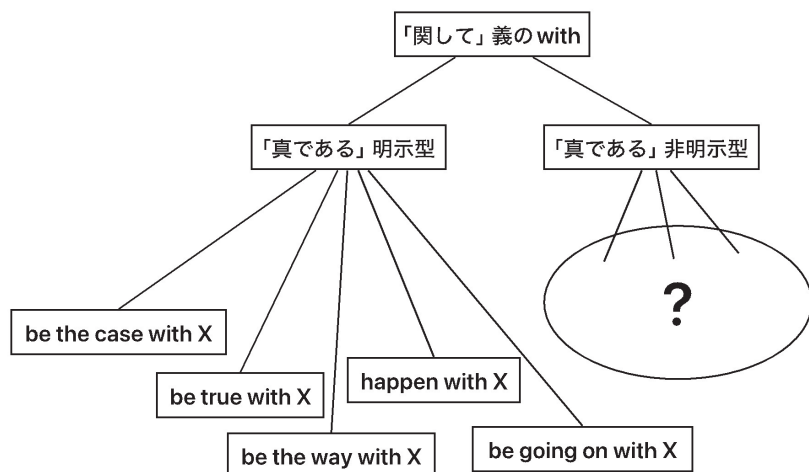


図 4 「に関して」義の with の用法のネットワーク（暫定）

with X], [be true with X], [be the way with X], [be going on with X], [happen with X] など慣習的な表現パターンがいくつも存在している。それでは、4 節で新たに指摘した非明示型の用法ではどうだろうか（図 4）。

本節では、図 4 の「？」部分に存在していると思われる具体的な慣習表現をいくつか指摘したい。

5. 1. [What's ... with X?]

[What's wrong with X?] や [What's the matter with X?] といった日本の英語教育でカバーされることが多い表現に加えて、[What's up with X?] もある。

(19) “What’s up **with** you?” she asked. “You look all twitchy.”

(Gillian Flynn, *Gone Girl*)

「どうしたの？」とゴウは言った。「そんな不安そうな顔して」

こうした表現の What's {wrong, the matter, up} 部分では、「○○の(身体, 精神などの)調子が悪い, いつもと異なる」という命題が真であることを前提として, その原因が何であるかを尋ねている。with X は, その空所「○○」を埋める要素を導く働きをしている。

5.2. [省略的「同じ／似た」表現 + with X]

まずは以下の例を見てほしい。

- (20) [状況説明] TV でのインタビュー。

[...] money doesn't change anybody. Money reveals them, you know. Same thing **with** success.

(<https://transcripts.cnn.com/show/lkl/date/2011-10-16/segment/01>)

[...] 人間, 金持ったって変わりはない。ただ, 金を持つと本性が出てしまうよね。成功もそれと同じ。

- (21) a. [状況説明] 言語学の講演を文字に起こしたもの。仮定 (If P, then Q) についてあることを述べた上で…

Similarly **with** negation.

(Ronald W. Langacker, *Ten Lectures on the Basics of Cognitive Grammar*)

似たことが否定に関しても言えます。

- b. [状況説明] 言語学の専門書から。程度副詞としての how と that に関してあることを述べた上で…

Similarly **with** as [...] (Dwight Bolinger, *Intonation and Its Parts*)

同様のことが as にも言える [...]

- (22) [状況説明] 文法書で, 例文 [i-iv] について説明した上で…

Analogously **with** [v-vii]. (Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum, *The Cambridge Grammar of the English Language*)

例文 [v] ~ [vii] についても同様のことが言える。

(20) の Same thing は「前で述べたのと同じことが成り立つ」、(21)／(22) の Similarly / Analogously は「前で述べたのと似たようなことが成り立つ」という命題を圧縮的に、あるいは省略的に提示している。そしてこれらの命題は空所付き命題である。たとえば (20) の Same thing 「前で述べたのと同じことが成り立つ」という命題は、「金が人の本性を暴く」の「金」部分が空所化した「○○が人の本性を暴く」という命題である。そして、空所「○○」を「成功」という要素で埋めると、この命題が真になるわけである。(21) と (22) に関しても同様である (Similarly with (21) and (22))¹²⁾。

5.3. [you を含まないネガティブ状況記述 + with you]

このパターンもまずは例を見ていただくのがよいだろう。

- (23) Columbo : Do you own a gun, sir?
 Brantley : It's all an act **with** you, isn't it? You're not the naïve, bumbling detective you pretend to be. I'll bet you've already checked with gun registration and you know I own a gun.
 Columbo : You got me there, sir. I admit I did check.

(Columbo, Season 9, Episode 2)

- コロンボ : 銃は所持していらっしゃいますか。
 ブラントリー : あんた、全部演技なんでしょう？ 馬鹿でおどきな刑事を装っているが、本当は違う。どうせ既に許可証のチェックも済ませていて、私が銃を所持していることを知っているんでしょう。
 コロンボ : こりゃ一本取られた。確かにチェックしました。

- (24) [状況説明] 看護師が、入院患者 Mrs. O とめごとになった相部屋の患者を叱っている。

It's been one thing after another **with** you two. I really believe that you've egged her [= Mrs. O] on. (Siri Hustvedt, *The Blindfold*)

あなたたち 2 人はまったくもう次から次へと。どうせあなたが O さんを煽ったんでしょう。

- (25) Oh, there it is. It always comes back to monkeys **with** you.

(*The Big Bang Theory*, Season 5, Episode 6)

また始まった。君って結局いつも猿の話に戻ってくるんだよな。

- (26) Bahari : Look, Nandi, we can talk about this later.

Nandi : It's always later **with** you, Bahari. (映画 *Deep Blue Sea 3*)

バハリ : なあ、ナンディ、この話はまた今度にしてもいいんじゃないか。

ナンディ : あなただったら、何でもかんでもまた今度になるじゃない。

これらの例はすべて、聞き手の言動に対する大なり小なりネガティブな評価が伝わるものであることがわかる。では、このような評価はどのような仕組みで伝わるのか。まず、with you よりも前の部分が、状況をネガティブに記述したものになっているが、その状況に関与する人への言及がない。代名詞 it が用いられ漠然とした言い方になっていることもあって、誰に関することを言っているのかが空所になっているのである。そしてこの空所を埋める要素 you が with によって導入される。これにより、ネガティブな状況記述が他ならぬ you に当てはまるものであると示され、you の言動に対する否定的な評価が伝達されるのである。

5. 4. [be + 頻度形容詞 + with X]

頻度を表す形容詞——たとえば rare, common, usual など——を用いた [be + 頻度形容詞 + with X] というパターンも慣習化している。この with も、本稿が記述してきた「関して」義の with であると考えられる。以下にいくつか例を挙げるが、rare の例 (27) はすでに (12) として見

たものである。

- (27) a. Side effects are rare **with** this medicine. = (12a)
 b. **With** other speakers such language is rare, or perhaps absent altogether. = (12b)
- (28) [状況説明] 文法書から。文頭の It は they が単数名詞を受けて使用されることを指している。
 It is particularly common **with** such antecedents as *everyone, someone, no one* [...]. (Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum, *The Cambridge Grammar of the English Language*)
 これは先行詞が *everyone* や *someone, no one* といったものである場合に特に一般的である。
- (29) As is usual **with** hybrids, the plants were sterile.
 混種の場合よくあることだが、その植物も実がならなかった。
 (安藤 2005:198 ; 訳文末句点は引用者)

たとえば (28) であれば、「○○を受けて they が使用されるのは特に一般的だ」という命題の空所「○○」を *such antecedents as everyone, someone, no one* 「*everyone* や *someone, no one* といった先行詞」で埋めるとこの命題が真になる、というのが文意である。

5.5. [{be / become} + 日頃からしていること + with X]

「関して」義の *with* は、[{be / become} + 日頃からしていること + with X] というパターンで用いることも慣習化している。「日頃からしていること」の部分に現れる名詞には、*habit* 「習慣として日頃からしていること」、*hobby* 「趣味として日頃からしていること」、*obsession* 「取り憑かれたように日頃からしていること」などがある。以下に例を示す。

- (30) From then on it got to be a sort of habit **with** him to drop in around five o'clock. We didn't always go to the same bar, but oftener to Victor's than anywhere else. (Raymond Chandler, *The Long Goodbye*)

それ以降、5時頃にひょっこり顔を出すのが彼のちょっとした習慣になった。その後一緒にいつも同じバーに行っていたというわけではないが、他の店に比べると、ビクターズに行くことが多かった。

- (31) Zeno : You don't know much about magic.

Samantha : Oh, I do! It's sort of a hobby **with** our family.

(*Bewitched*, Season 1, Episode 16)

ジーノ : 君はマジックのことをよく分かっていないだろう。

サマンサ : あら、わかってるわよ！ だって我が家ではマジックがちょっとした趣味みたいなもんだもの。

- (32) And after our divorce, the collection became an obsession **with** Rudy. (Columbo, Season 1, Episode 4)

離婚して、コレクションに取り憑かれてしまったんです、ルディーは。

これらの例において、with 句を除いた部分で提示されている命題では、誰がしているのか、誰が行ないなのかが指定されていないことに注意してほしい。たとえば (31) を見てみると、It's [=Magic is] sort of a hobby の部分では、誰がマジックをするのかが表現されていない。「マジックをすることが○○の趣味のようなものになっている」という空所付き命題なのである。そしてこの空所を our family という要素で埋めると、当該の命題が真になるというのが文意である¹³⁾。

5.6. まとめ

本節の内容のまとめとして、図4の「？」部分を本節で指摘した表現パターン（の特に頻度が高いもの）で埋めたものを図5に示す。本節で指摘

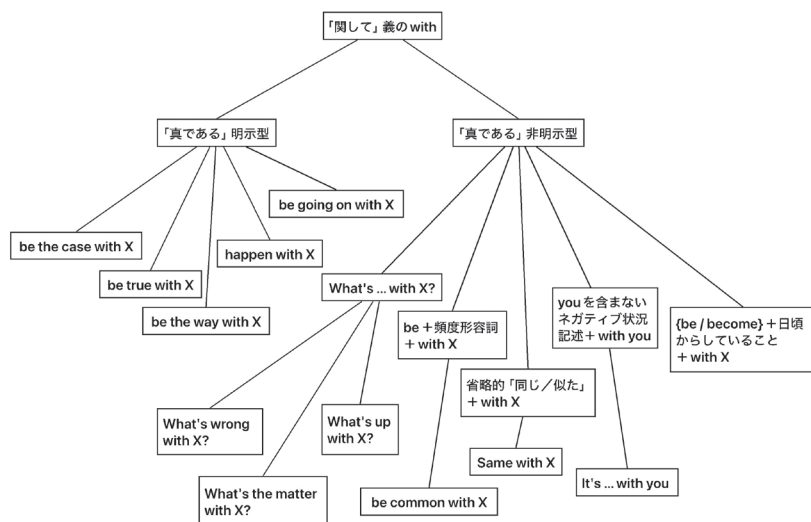


図5 「関して」義の with の用法のネットワーク

していない表現でこのネットワークに位置付けられるものは数多くあり、その発見を読者自身に楽しんでほしい（そして発見したものはこの図に自分で描き加えてほしい）。

6. 要素を命題から取り出す動機

「関して」義の with の用法を特徴付けるにあたって、ここまで除外してきた観点に「なぜ、命題をそのまま提示するのではなく、わざわざ空所付き命題と空所を埋める要素に分離する（要素を with の目的語として独立させる）という一見無駄なワンステップを踏むのか」という観点がある。

端的に言えば、完結した命題から X の部分をことさらに取り出して目立たせるだけの動機があるのである。その目立たせる動機とは、主に、広い意味での対比である。ここでの「広い意味」には2つの意味合いがある。

まず、X を X 以外の特定の何かと対比する場合だけでなく、X を（漠然

とした) X 以外のものたちと対比する場合も、「対比」に含めている。たとえば (23) (以下に (33) として再掲) の該当箇所を見直してみよう。

(33) It's all an act **with** you, isn't it?

あんた、全部演技なんでしょう？

この話し手は you = 聞き手 = 刑事コロンボを普通の人たちとは違うものとして際立たせていると考えられる。

次に、ここでは平沢 (2022a, 2025b) と同様に、異なる二者に注目して比較を行なう場合を広く「対比」と言っている。たとえば「甘口の日本酒は好きだが、辛口のは苦手だ」という文でも「日本酒は甘口も辛口も好きだ」という文でも、甘口の日本酒と辛口の日本酒という異なる 2 種類のものに注目して比較がなされているため、2 種類の日本酒が「対比」されていることになる。その比較により「好き／嫌い」という正反対の結果が導かれるか、「好き／好き」という同じ結果が導かれるかは、ここでは、対比であるかどうかを左右するファクターではない。さて、このようなかたちで「対比」という言葉を使うことにすると、(2) (以下に (34) として再掲) も with X の X が対比に参与している例だと言える。

(34) This used to be the case **with** my mom too.

うちのお母さんも昔そうでした。

この話し手は、聞き手の母親と話し手の母親を「対比」しているのである。

なお、「真である」明示型は、対比という動機に加えて、対比における異なりの部分——情報構造上重要な部分——を文末に提示することで聞き手・読み手に自然な情報処理を促すという動機もあるように思われる (野中大輔氏の指摘による)。たとえば (34) であれば、相手の母親に成り立っている事柄が誰に関しても成り立っているのかという情報を文の終わり付近

で提示することで、理解しやすい1文となっている。2節と3節で取り上げた「真である」明示型表現はどれも、たしかに、with句が「真である」の表現よりもあとに提示されるのが普通である。

7. まとめに代えて：具体知識優先の原則からの注意

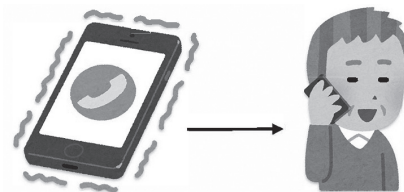
本稿を、なんとか英語を上手に使いこなすためのヒントにならないかと思ってお読みいただいている場合には、ひょっとすると、「関して」義のwithは命題の空所を埋める要素を導くだけ覚えておけば母語話者と同じように使えるようになるのだ（注意すべきことといえば6節の対比条件を満たすかたち使うようにすることくらいだ）と思ってしまったかもしれない。そのようにして記憶の負荷を減らそうとする発想に対して警鐘を鳴らすことをもって、本稿の締めくくりとしたい。

人間は、「言いたいこと」を書いたり話したりするとき、脳内に定着している表現知識の中で、どのような知識を活性化させるだろうか。原則として、言いたいこととの合致度合いが高い意味を持つ表現の知識が優先的に活性化すると考えられる。たとえば、言いたいこと——描写したい対象——が以下の図6(a)の動物である場合に、「生き物」という名詞の知識と「犬」という名詞の知識のどちらが活性化しやすいだろうか。

もちろん「生き物」よりも「犬」である。これは、「生き物」の意味と



(a) 言いたいこと（描写対象）1



(b) 言いたいこと（描写対象）2

図6

「犬」の意味を比べると、後者の方が描写しようとしている対象(図6(a))との合致度が高いからである。あるいは、描写したい対象が上の図6(b)の行為である場合に、「AにB」(B:動詞)という語彙未指定の知識と「電話に出る」という語彙指定済みの知識のどちらが活性化しやすいだろうか。もちろん「AにB」よりも「電話に出る」である。これは、「AにB」の意味と「電話に出る」の意味を比べると、後者の方が描写しようとしている対象(図6(b))との合致度が高いからである。まとめると、具体性の高い知識ほど活性化されやすいということである。これを具体知識優先の原則と呼ぶことにしよう¹⁴⁾。

ここで with の実例を見直してみる。たとえば(34)の This used to be the case with my mom too を発話した話者が直接的に参照した知識は、具体知識優先の原則を踏まえると、具体性の高い知識である [be the case with X] だろう(これが慣習的な言い回しであり母語話者であれば丸ごと記憶しているようなものであることを思い出そう)。これは図5で言うと下の方の知識、枝分かれの(元ではなく)先の方に位置している知識である。これよりも上の知識、ましてや一番上、枝分かれの元の方の知識——「関して」義の with の本質とも言うべき最も抽象的な知識——ではないのである。こうした知識のネットワーク図の枝分かれの先の方にある具体的な知識をたくさん覚え、それを使おうとすることが、自然な英語の運用には欠かすことができない。

Notes

- * 原稿の一部あるいは全体に関してコメントをくださった西村義樹先生、古我征道氏、野中大輔氏、萩澤大輝氏、松田俊介氏、山崎竜成氏に感謝したい。
- 1) 本稿では、「AはBである」というように主語と述語からなり、真偽を問うことができる言語的内容のことを「命題」と呼ぶ。「重大な事件」は命題ではないが「重大な事件が起きた」は命題である。「彼の大胆さ」は命題ではないが「彼は大胆だ」は命題である。本稿における「命題」という用語の守備範囲については注4でもう少し補足する。

- 2) 以下、特にことわりのない限り、引用例文中の強調は引用者による。
- 3) 「*太郎は次郎は保育士になった」という文が結局太郎の話なのか次郎の話なのか定まっておらず意味をなさないのと似ている。
- 4) Sperber and Wilson (1995: 2.2) のように、空所があって意味的に完成していないものは命題 (proposition) とは呼ばないという立場もあるが、本稿ではこうしたものも命題と呼ぶことにする。Sperber and Wilson 流の用語法に馴染んでいる読者は注意されたい。
- 5) 本稿における「空所化」は、一部の言語理論において用いられる「空所化変形 (gapping)」とは無関係であることに注意されたい。
- 6) ここで that が指しているのは「○○が」という主語を含まない「彼と一緒に仕事をして大変な思いをする」という述語部分なのではないか (つまり命題ではないのではないかと) と思われるかもしれないが、命題でないものは真偽を問うことができないので be the case とつながることはない。
- 7) be the case with に関する記述が完了したこのタイミングで、「分類」に関する筆者の立場を明確化しておくのがよいかもしれない。筆者は、一般に、言語表現の「分類」の仕方を一通りに定めることが理想的であるとも可能であるとも考えていない。本稿は be the case with の with を「関して」義の with として分類しているが、だからといって、たとえば「伴って」義の with ではまったくないと主張しているわけではない。たとえば例 (2) の This used to be the case with my mom too は「関して」義で解釈すると「This が表している空所付き命題は、空所を my mom で埋めると、真であった」となるが、「伴って」義で解釈して「This が表している空所付き命題は、my mom を伴っているようにすると、真であった」と考えても問題ないだろう。このように、本稿において「関して」義の用例として分析されている例は、そうとしか分析できない例として提示されているわけではない。このことには以下くれぐれも注意されたい。
- 8) 本節で扱った [主語命題 + be true + with X] と実質的に同じ意味を表すと言ってよいであろう表現に、[主語命題 + be true + of X] と [主語命題 + be true + for X] がある。これら三者の意味や用法の微妙な違いについては筆者の英語力の不足により未だ何も言えることはない。日本の中学・高校における伝統的な教育では of と for のケースと違って with のケースが扱われていないかもしれないが、そしてそれゆえに本稿は慣習から外れたものを扱っているという印象を受けてしまったかもしれないが、with のケースも十分に慣習化している ((6b) が辞書の用例であることに今一度注目してほしい)。
- 9) その場合 with は、4.2 節で扱う「真である」非明示型の用法で用いられていることになる。たとえば (8a) の something funny was going on with

the wolves は, it was the case with the wolves that something funny was going on の be the case 部分が明示されていないものと考えられることになる。

- 10) これに加え, what や something など具体的な内容を持たない名詞が主語に来やすいという共通点も指摘できる。
- 11) rare の(ここでの)意味を「命題が真であることが少ない」(be not often the case) のように捉えるならば, ここで挙げている例は「真である」明示型ということになる。そしてそのような捉え方は十分に可能だろう。注 7 から示唆されるように, 筆者は, 「関して」の with を含んだ表現は必ず「真である」明示型と非明示型の片方にのみ分類できるとは考えていないのである。こうした姿勢については平沢 (2025a) も参照されたい。
- 12) 学術的な文章でも Similarly や Analogously という副詞 1 語だけで命題的な意味を伝達することが慣習化しているというのは興味深い。
- 13) 種々の表現パターンの紹介が終わったこのタイミングで, 2 点補足しておきたい。まず, 注 7 の内容を思い出していただきたい。ここで「関して」義に分類した用例・用法は, そのようにしか分類できないものとして提示しているのではない。次に, 紙幅制限ゆえに本稿で扱えなかったパターンとして, [わからないものだ + with X] がある。たとえば, スーザンは思考や行動が読めない人だ (一部の人が使う俗な言い方で言えば「不思議ちゃんだ」) ということを伝達するために You never know with Susan. や It's hard to tell with Susan. などと言ったりする。このパターンも本稿で扱っている「真である」非明示型として分析できる。詳細は稿を改めて論じる。
- 14) この段落の内容についてより詳しくは平沢 (2022b: 3.1 節), 平沢・野中 (2023: 2.1 節) を, さらに専門的には Langacker (2000, 2009, 2017) を参照されたい。

参考文献

- 安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』東京: 開拓社.
- 平沢慎也 (2018) 「for all I know の意味と使用, 動機付け」『東京大学言語学論集』40: 51–84.
- 平沢慎也 (2019) 「about は「について」か」『東京大学言語学論集』41: 71–102.
- 平沢慎也 (2021) 『実例が語る前置詞』東京: くろしお出版.
- 平沢慎也 (2022a) 「「自分で」を表す for oneself: 「自分のためになる」の意味を含むというのは本当か」『東京大学言語学論集』44: e15–e46.
- 平沢慎也 (2022b) 「英語の前置詞 on と「関係の断絶による迷惑」」『教養論叢』143: 105–138.

- 平沢慎也 (2025a) 「S know O by sight の意味：この by は〈手段〉か非〈手段〉か」『教養論叢』146:161–193.
- 平沢慎也 (2025b) 「〈他面意識〉から考える S know O by sight の意味：by nature や by trade との接点」『慶應義塾大学日吉紀要 英語英米文学』81:1–32.
- 平沢慎也・野中大輔 (2023) 「認知文法から考える「意識／直訳」問題：「直訳」は本当に「直」なのか？」『慶應義塾大学日吉紀要 英語英米文学』77:51–94.
- Langacker, Ronald W. (2000) A dynamic usage-based model. In: Michael Barlow and Suzanne Kemmer (eds.), *Usage-based models of language*, 1–63. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald W. (2009) A dynamic view of usage and language acquisition. *Cognitive Linguistics* 20: 627–640.
- Langacker, Ronald W. (2017) Entrenchment in Cognitive Grammar. Hans-Jörg Schmid (ed.), *Entrenchment and the psychology of language learning: How we reorganize and adapt linguistic knowledge*, 39–56. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Sperber, Dan and Deidre Wilson (1995) *Relevance: Communication and cognition*. 2nd edition. Oxford: Blackwell.